

法然浄土教と道綽浄土教

—『選択集』および法語における『安樂集』の影響と顕彰—

佐 藤 健

はじめに

法然の浄土教に道綽の浄土思想がどのように影響を与え、役割を果たしたかを説明するのが本稿の目的である。周知のように法然は『選択集』において「偏依善導一師」と、自らの立場を明らかにしている。この「偏に善導一師による」と断言する背景には法然が新たに提唱しようとする浄土宗は、善導という偉大な宗教者を抜きにしては成り立たないと確信する故である。法然は自身の宗教体験を通して、まさに善導の本願念仏の信仰の境地に感応し道交したからであろう。法然にとっては道綽も善導も遙か国を異にする五百数十年まえの人物であり、その著作を通して知る浄土教祖師である。

法然には道綽、善導と二師を一連に受けとる態度と、道綽と

善導を切り離し受け取ろうとする二つの態度がある。さらに、先に述べたように「偏依善導一師」という善導を特別に見る姿勢があつたことは否定できない。善導を三昧発得の師と尊崇し、弥陀の化身と仰ぎ、その著作である『観経疏』を「証定疏」といたたく態度はそのことを明かしている。

かといって、法然は善導の浄土教義をすべて丸ごと受け入れるのではなく、善導の主張する称名正定業という一点に善導の全人格を見たのである。したがって受容の仕方は主体的であり、体験的であり、法然独自のものであつたといえる。これは道綽の場合においても同様であつて、法然が到達した本願の念仏一行による救済という立場から、中国浄土祖師の教義に関するものを採用するものである。法然が善導の師である道綽によらず、善導による理由に、道綽の三罪をあげている。なぜ法然がこの

ような事実とは認めがたい伝説を根拠に「偏依善導一師」の理由とするのか理解に苦しむが、これも法然の実践から得られた主体的な立場からのものであると考えざるを得ない。

このようなことを一応ふまえて道綽の『安樂集』に説かれる浄土敎思想が法然の著作のうえに、具体的にどのように表れているかを検討することにより、それが法然の浄土敎にどのように展開しているかを考えて見たい。いうまでもないが、道綽の敎義といえやはり聖道門、浄土門の二門判に関するものを中心となる。⁽¹⁾

一、時機相應の仏敎

法然は『選択集』第十六章の最後に「まさに知るべし。浄土の敎、時機を叩きて行運に当たり、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり。」(『法然全』三五〇、原漢文)と結んでいる。

この「時機を叩いて行運に当たれり」というのは、念仏の敎えこそ末代の凡夫になつたもので、実効性のある時運を得たものであることをいう。それは水面にうつる月の、水が昇らずに月を感じ、月が降らずに水に感じるようなものである。要するに念仏による凡夫の心と、阿弥陀仏の心の感應道交を明かしている。法然の浄土敎はこの時と機に対する省察のふかまりに

あつた。こうした時機相應という立場より仏敎を見直したのが聖道浄土の二門判である。

道綽は『安樂集』第一大門に、敎が興る理由を検討して

時に約し、機に被らしめて勧めて浄土に帰せしむ。もし敎、時機に赴けば修し易く悟り易し、もし機、敎、時乖けば修し難く入り難し。
(『大正』四七、四、上、原漢文)

と、仏敎を実践して悟りを開くにあたつては、時と機の適応がいかに重要であるかを主張している。そして

今時の衆生を計るに、すなわち仏世を去りたまいて後の第四の五百年に当たれり。まさにこれ懺悔修福し、仏の名号を称すべき時のものなり。
(『大正』四七、四、中)

と結んでいる。

敎法を頂戴し実践するにあたつては、今がどういう時代であり、実践する衆生の機根がどうかを配慮しなければならぬ。これは道綽が生きた時代が非常に苛酷な社会背景を担っていたことと無関係ではない。亡国、廃仏という動乱のなかで、人心は乱れ戒定慧といった実践はもはや機能しなかった。残された道は仏の本願を信じて浄土往生を願うことしかなかったのであろう。『安樂集』には、生死に流転して輪廻無窮なる現実相が実にリアルに表現されている。⁽²⁾ 現実の世界に対する厭離観が繰り返し示されている。人間の罪悪性、煩惱性も繰り返し

述べられている。まさに末法は實際のものとして考えられたのであろう。この聖道、浄土二門による仏教の判別は輪廻無窮な存在からいかにすれば抜け出すことができるかという立場から立てられたものである。法然はこの聖道、浄土という二門でもって仏教を判釈する道綽の態度に引かれたのであろう。

二、『選択集』第一章における

「聖道浄土二門」の受容

『選択集』第一章は、まさしくこの道綽の聖道、浄土二門の説示を引いて、浄土宗の仏教における立場を明かすことに努めている。標題に「道綽禪師、聖道浄土の二門を立てて、しかも聖道を捨ててまさしく浄土に帰するの文」(『法然全』五一二)とあることから、法然の聖道を捨て、浄土を取るべきであるとする立場を明かすものである。

問うて曰く。一切衆生はみな仏性あり。遠劫よりこのかたまさに多仏に値へるなるべし。何によつてか今に至るまでなお自ら生死に輪廻して、火宅を出でざるや。

答えて曰く。大乘の聖教によるに、まことに二種の勝法を得てもつて生死をはらはざるによる。ここをもつて火宅を出でざるなり。何者をか二とす。一には謂く聖道。二に

は謂く往生浄土なり。その聖道の一種は今の時、証しがたし。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理は深く、解は微なるによる。この故に大集月藏經に云く。我が末法の時の中に億億の衆生、行を起こし道を修せんにいまだ一人も得る者あらじ。当今は末法、現にこれ五濁惡世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。この故に大經に云く。もし衆生ありてたとひ一生惡を造れども命終の時に臨みて、十念相續してわが名字を称せんに。もし生ぜずんば正覺をとらじ。またまた一切の衆生はすべて自ら量らず。もし大乘によらば真如実相第一義空、かつていまだ心を措かず。もし小乘を論ぜば見諦修道に修入し、ないし那含、羅漢に、五下を断じ五上を除くこと道俗を問うことなくいまだその分にあらず。たとひ人天の果報あれども、みな五戒十善によつてよくこの報を招く。しかるに持ちうる者は甚だ希なり。もし起惡造罪を論ぜば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。ここをもつて諸仏の大慈、勧めて浄土に歸せしむ。たとひ一形惡を造れどもただよく意を繫けて専精に常によく念仏すれば、一切の諸障自然に消除して、定んで往生を得ん。何ぞ思量せずしてすべて去る心なきや。

〔法然全〕五一二

と言う。

法然が『選択集』において『安樂集』を直接引用するのはこの文章と、第十一章の私釈段で引用される念仏の始終兩益を明かす文だけである。後者に関しては後に触れるが、何といつてもこの聖道浄土二門説が道綽への影響を考へる場合は重要である。

法然はこの道綽の文中、傍線を付した「当今は末法にして、現にこれ五濁惡世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。」と「もし起惡造罪を論ぜば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。これをもつて諸仏の大慈、勸めて浄土に歸せしむ。」という二文に注目したのではなからうか。というのは末法時における、罪惡深重な衆生の救済こそ法然の求めるところでもあった。しかも道綽の「浄土の一門のみ」とする斷定に引かれたのではないか。

標題の「聖道を捨てて正しく浄土に歸すべき」とあるのはこれを受けるものといえる。したがつて二門を立てる目的は聖道、浄土の二門を分別することによつて、浄土門によるべきことを明かすものであることは明確である。しかも末法時という時代と罪惡深重な凡夫という時と機に照らしての選択であることが重要である。

法然は『選択集』第一章の私釈段において、この聖道浄土二門に関して自らの考えを明かすのであるが、二章以下においても散発的に二門説に触れる箇所がある。以下、その内容をまず

示しておく。

(第六章)

聖道門の諸經は先に滅す。浄土門の『無量壽經』のみただ残り、止住すること百歲。

(第八章)

一切の別解、別行、異學、異見等は聖道門の解行學見を指す。その余は浄土門である。善導の考へもこの聖道浄土の二門を出るものではない。

(第十二章)

世間の師は仁義礼智信等を教える師で、出世の師とは聖道浄土の二門等を教える師である。

(第十六章)

二種の勝法のなかでは、しばらく聖道を闇いて浄土門に歸入せよ。

善導はひとえに浄土を宗とし、聖道を宗とせず。

この中、第八章の「善導の考へもこの聖道浄土の二門を出るものではない。」と、第十六章の「偏依善導一師」の理由の一つにこの聖道浄土の判別をもちいていることは注目される。第六章の「特留此經」に関しては後に改めて取り上げる。

次に第一章の私釈段に見られる法然の聖道浄土二門に関する展開をまとめて見ることにする。

1、道綽の考えに基づけば、二門により仏教を明かしたことになる。

2、浄土宗の立場から言えば、聖道門は大乗、小乗をその中に含むものである。そして大乗、小乗の異なりはあるが、聖道門は結局この現実世界において四乗道を修行して仏果を獲得することを目的とする教えである。

一方、浄土門は、往生浄土を専一に説く経論に基づく教えと、付帶的に往生浄土を説く経論に基づく教えがあるが、浄土宗の立場は前者である。

3、道綽が二門を立てて、浄土の信仰を勧めるのは聖道門を用いないで、浄土門への帰入を勧めることにあつた。道綽はその理由を二点しめしている。一つは釈尊が入滅して永い年月が経過したこと。もう一つは、仏教の教理は深いが、衆生の理解する能力が微弱である。

4、浄土宗において二門を設けて浄土信仰を勧めるのは、道綽だけではない。曇鸞、天台、迦才、慈恩にもある。曇鸞、天台、迦才のいう難行道は聖道門のことであり、易行道は浄土門のことである。また、慈恩のいう三乗は聖道門のことであり、浄土は浄土門のことである。

5、先に聖道門を学す者であつても、浄土門を志せば、即座に聖道門はやめるべきである。曇鸞、道綽でさえ聖道

門から後に浄土門に転向したのである。まして現代の凡夫は速やかに浄土門に帰入すべきである。

6、聖道門に資師相承の血脈があるように、浄土門にも血脈がある。

以上が第一章私釈段における聖道浄土二門説の展開である。この第一章においては善導には全くふれていない。ただ血脈譜において名があげられているだけである。しかし、第二章以下は善導の教義が全面的に採用される。したがって「偏依善導一師」を標榜する法然においても、この道綽の二門説は浄土宗の教学の立場を鮮明にする点において最適なものであつたと考えざるを得ない。この『選択集』第一章、第二章の流れからすれば、道綽、善導と二師を一連にとらえることは妥当性があるといえる。

いずれにしても法然は現在の凡夫にとっては阿弥陀仏の浄土に往生を求めることが唯一の仏道であると堅く信じ、浄土門へ帰入を勧めることが先決であつた。その際、二門を設けて浄土信仰を勧める祖師はほかにもあつたが、道綽の聖道浄土の二門判釈が最適であると考えたのであろう。次に、『選択集』以外の法然の遺文において、この聖道浄土二門説がどのように示されているかを見ることにする。

三、『往生大要鈔』に見られる聖道浄土二門

『往生大要鈔』は『和語灯録』巻一に所収されているもので、まず最初にこの聖道浄土の二門説をあげ、次に安心、起行という観点より三心を詳しく述べている。起行に関しては「下の起行にあかすべし」とあるが、その部分は欠落して存在しない。大まかに言うところの『往生大要鈔』は道綽の二門判と善導の三心釈、そして確かなことは不明であるが善導の起行論により構成されているようである。長文であるが二門説に関する所を引用すると次のようである。

いまわが浄土宗には、二門をたてて釈迦一代の説敎をおさむるなり。いはゆる聖道門浄土門なり。はじめ花嚴阿含より、おはり法華涅槃にいたるまで、大小乗の一切の諸経にとくところの、この娑婆世界にありながら断迷開悟のみちを、聖道門とは申すなり。これにつきて大乘の聖道あり、小乗の聖道あり。大乘にも二あり、すなはち佛乗と菩薩と也。小乗に二あり、すなはち声聞と縁覚との二乗なり。これをすべて四乗となづく。(中略) およそ大小乗をえらばず、この四乗の聖道は、われらの身にたへ、時にかなひたる事にてはなき也。(中略) 四弘六度の願行成就しがたし。身子は六十劫まで修行して、乞眼の惡縁にあひて、たちま

ちに菩薩の廣大の心をひるがへしき。いはんや末法のこのごろをや。下根のわれらをや。たとひ即身頓証の理を觀ずとも、真言の入我々入、阿字本不生の觀、天台の三觀六即中道実相の觀、花嚴宗の法界唯心の觀、佛心宗の即心是佛の觀、理はふかく、解はあさし。かるがゆえに末代の行者、その証をうるに、きはめてかたし。このゆへに道綽禪師は、聖道の一種は今の時は証しがたしとの給へり。すなはち大集の月藏經をひきて、おのおの行すべきありやうをあかせり。こまかにのふるにおよばず。

つぎに浄土門は、まづこの娑婆世界をいとひすて、いそぎてかの極樂浄土にむまれて、かのくに、して仏道を行ずる也。しかればかつぐ浄土にいたるまでの願行をたて、往生をとぐべきなり。しかるにかのくににむまるゝ事は、すべて行者の善惡をえらばず、たゞほとけのちかひを信じ、信ぜざるによる。五逆十惡をつくれるものも、たゞ一念十念に往生するは、すなはちこのことなり也。このゆへに道綽は、たゞ浄土の一門のみありて、通入すべきみちなりと釈し給へり。

通じているべしといふにつきて、わたくしに心うるに、二つの心あるべし。一にはひろく通じ、二にはとく通ず。ひろく通ずといは、五逆の罪人をあげてなを往生の機にお

さむ、いはんや余の軽罪をや、いかにいはんや善人をやと心えつれば、往生のうつはものにきはるゝものなし。かるがゆえにひろく通ずといふ也。とをく通ずといは、末法万年のち法滅百歳まで、この教とゞまりて、その時にきゝて一念する、みな往生すといへり。いはんや正法像法をやと心えつれば、往生の時もるゝ世なし。かるがゆへにとをく通ずといふなり。しかればこのこゝろ生死をはなれんとおもはんものは、難証の聖道をすてて、易往の浄土をねがふべき也。

又この聖道浄土をば難行道易行道となづけたり。たとへをとりてこれをいふには、難行道とはさかしきみちをかちよりゆかんがごとし。易行道とは海路をふねよりゆくがごとしといへり。しかるに目しい足なえたらんものは、陸地にはむかふべからず、たゞふねにのりてのみむかひのきしにつくべき也。しかるにこのころのわれらは智慧のまなこしいて、行法のあしおれたるともがら也。聖道難行のさかしきみちには、すべてのぞみをたつべし。たゞ弥陀の願のふねにのりてのみ、生死のうみをわたりて、極樂のきしにはつくべきなり。いまこのふねといは、すなはち弥陀の本願にたとふる也。この本願といは、四十八願也。そのなかに第十八の願をもて衆生の往生の行のさ

だめたる本願とせり。二門の主旨略してかくのごとし。

聖道の二門をさしおきて、浄土の二門にいらんとおもはん人は、道綽善導の釈をもて所依の三部經を習ふべきなり。さきには聖道浄土の二門を分別して、浄土門にいるむねを申ひらきつ。いまは浄土の一門につきて、修行すべきやうを申すべし。

〔法然全〕四七―五一

法然は『往生大要抄』の冒頭に道綽の聖道、浄土二門の概要を平易に明かしている。

最後の「さきには聖道浄土の二門を分別して、浄土門にいるむねを申ひらきつ。いまは浄土の一門につきて、修行すべきやうを申すべし」とあるように、「選択集」と同様に聖道浄土の二門を明かし、つづいて善導の安心、起行論へと展開するようである。

『選択集』の内容と矛盾するものではなく、法然の聖道浄土二門の受容態度をよりよく知ることができる。「われらの身にたへ、時にかなひたる事」、「いはんや末法のこのごろをや。下根のわれらをや」、「理はふかく、解はあさし。」などは『選択集』の内容を分かりやすくかみ砕いて説くものである。また、「四弘六度の願行成就しがたし。身子は六十劫まで修行して、乞眼の悪縁にあひて、たちまちに菩薩の広大の心をひるがへし

き。」とあるのは、道綽が『安樂集』第十一大門に善知識となり西方往生を勧めよと説いている。そして往生を勧める理由として

舍利弗ここにおいて発心し、菩薩の行を修する。すでに六十劫をへて、悪知識の乞眼の因縁に逢てついにすなわち退転す。ゆえに知ぬ。火界にして道を修することは甚だ難し。ゆえに西方に帰せしむ。〔大正〕四七、一一、上と述べている。

あるいはこれにヒントを得たのかも知れない。この後、続いて道綽は「一たび往生を得れば、三学自然に生ず。勝進して万行普く備ふ」と述べている。あくまで推測の域をでないが、法然が自身を「三学の器にあらず」と自覚し、三学の他に出離の道を求めたことと、この道綽の往生浄土こそ三学が自然に増進して、万行の備わる場であることとは何らかの関連を持つものと考えられる。

四、『選択集』第十六章の「三重の選択義」と

「八種の選択」とに関連して

先に『選択集』第一章を中心に道綽の聖道浄土二門説の受容を検討した。ここでは『選択集』第十六章の三重の選択義と八種

の選択義に見られる二門説を考えてみたい。まず、三重の選択義というのは、『浄土三部経』と『般舟三昧経』における八種の選択義を示して、三経はすべて念仏を宗要とすることを明かした後

計みれば、それ速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門を闇きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正雑二行の中には、しばらく諸の雑行を抛つて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲せば、正助二業の中には、なお助業を傍にし、選んで正定を専らにすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏名を称するなり。名を称すれば、必ず生ずることを得。仏の本願に依るが故なり。〔法然全〕三四七

と述べている。

この三段階の選択は、まず道綽の聖浄二門判により浄土門に拠るべきことを明し、次に浄土門に帰入したなら、善導の正雑二行説により、雑行を捨てて往生に直接関連する正行を専ら修すべきであるとする。さらに五種の正行を行うにあたっては、まさに阿弥陀仏の本願の行である称名一行を専修すべきであると結論する。この三重の選択義は『選択集』の第一章に説かれる聖浄二門の判別、第二章の正行雑行の二行分別、そしてさらに称名正定業と助業という二業の峻別を通して念仏が本願の行であるから決定往生業となることを簡潔に説くものである。こ

の三重の選択義に限って言えば、これは道綽と善導二師の教学を根拠とするものである。したがって道綽、善導を一連に受容する態度とみることができる。

「それ速やかに生死を離れんとは欲はば」とあるのは、浄土門により、本願の念仏によるがゆえに速やかに迷いを離脱することができるのである。道綽にはこの浄土門によつて往生を願えば一形に不退位に至ることができる。これは娑婆世界における一万劫に及ぶ修行にも匹敵するものであるとする。道綽は『安樂集』第五大門に修道の遅速を明かして

一切衆生苦を厭い樂を求めて、縛を畏れ解を求めざることはなし。皆、早く無上菩提を証せんと欲するものは、まずすべからく菩提心を発すを首となすべし。この心、識りがたく起こしがたし。

（『大正』四七、一六、中）
と、無上菩提を覺ろうとすれば、まず菩提心をおこさなければならぬ。しかしこの菩提心を起こすことは非常に困難である。また、たとえ菩提心を起こしても、多くの修道を積み、一万劫をへてはじめて不退の位をさとののである。ただ一劫の間に受ける生死であっても、数えることができないのに、一万劫に受ける受身生死の苦しみは数えることができない。そして

もしよく明らかに仏經を信じて、浄土に生ぜんと願すれば、寿の長短に随いて一形にすなわち至りて位不退に階む。

この修道一万劫と功を齊しくす。

（『大正』四七、一六、下）
と述べている。往生を願うことが大きな修道の短縮になることを明かしている。「それ速やかに生死をはなれんと欲わば」という法然の呼びかけの背景には聖道門の修道を達成することの困難さ不安が横たわっていたのである。

この三重の選択義のまゝに、法然は八種の選択義をあげている。それは『無量寿經』の三選択、『觀經』の三選択、『阿弥陀經』の一選択ある。そして

しかのみならず般舟三昧經の中に、また一つの選択があり。いわゆる選択我名なり。

（『法然全』三四七）

法然がなぜ浄土三部經以外の『般舟三昧經』から「選択我名」を見いだしたかは不明であるが、道綽は『安樂集』第四大門において、念仏三昧を宗とする經論を八種あげている。その五番目に『般舟三昧經』を挙げている。

第五に『般舟經』によるに云く。時に跋陀和菩薩あり。この国土において阿弥陀仏ましますと聞きて、数数念を係く。この念によるが故に阿弥陀仏を見たてまつる。すでに仏を見たてまつりおわりて、すなわち従いて啓問す。まさに何なる法を行じてか彼の国に生ずることを得べし。その

時阿弥陀仏、この菩薩に語りて言く。我が国に來生せんと欲はんものは、常に我が名を念じて休息あることなかれ。かくのごとくして我が国土に來生することを得ん。まさに仏身の三十二相悉くみな具足して、光明徹照し端正無比なることを。

〔大正〕四七、一五、上

とある。道綽はこの「常に我が名を念じて休息あることなし」という説示に注目したのであることは明らかである。法然もまたこの『安樂集』により「選択我名」という選択義を思いついたのかも知れない。実は偶然かも知れないが、道綽が『選択集』の第十一章に引用する念仏の始終兩益の文は、この『般舟三昧經』引用の直前にある。

以上、八種の選択義と三重選択義は法然の独自の教義とされる選択思想を明かすものである。法然は『選択集』の最後のこの三重の選択義をもつて結びとする。良忠は「この十六句は集の大意なり」と評している。三重の選択義は念仏一行に至る論理的展開を示すものである。また八種選択義は四經典に見られる弥陀、釈迦、諸仏のいわゆる三仏の選択である。そうしてみればこの二つの選択義において道綽はなくてはならない立場にあるといえるのではないか。

五、浄土一宗の独立

再び第一章の私釈段の内容を見れば、そこには二門の教相判釈、宗名、所依の経論、相承説といった内容が明かされている。これらは一宗独立の要件でもある⁽³⁾。最初に道綽の聖浄二門判をひいて、仏教における浄土宗の立場、位置を鮮明にすることに努めている。そして浄土宗という宗名は法然の創唱ではなく、すでに中国の元暁、慈恩、迦才においても見られることを立証している。また、浄土宗の所依の経論として、いわゆる浄土三部經と天親の『往生論』をあげている。さらに、道綽、善導の一家の師資相承の二説あげている。さらに第一章の私釈段に見られる、一、聖浄二門判。二、宗名。三、三經一論。四、師資相承説は、道綽の聖浄二門判を基盤とし、一宗の独立の要件にかなうものといえる。聖浄二門判は道綽が創唱して以来、善導も源信も注目しなかったものである。法然において初めて用いられたということは、法然に浄土門の自立、独立という意図があつたと見なければならぬ。

宗名に関しては聖浄二門によるものであるが、法然が難行、易行といった教判を用いなかっただのは、聖道浄土が最も適していると判断したからであろう。

三經一論は法然の創唱であるが、曇鸞、道綽、善導といっ

た中国の浄土祖師の浄土三部經を重視する傾向に導かれたものであろう。道綽は『安樂集』第八大門において、この娑婆を捨てて、浄土往生をねがう經典として六經をあげている。

第一に略して諸の大乘經典をあげ來証して、みな此を捨てて彼をねがわしむとは、

一には謂く。耆耆崛山の說。大經二卷。

二には觀經一部。王宮、耆耆両会の正說なり。

三には小卷無量壽經。舍衛の一說。

四にはまた十方隨願往生經の明証あり。

五にはまた無量清淨覺經二卷。一会の正說なり。

六にはさらに十往生經一卷あり。

諸余の大乘經典にも指讀するところおとし。請觀音、大品經等のごとし。また龍樹、天親等の論のごとし。歎勸一にあらず。余方の浄土はみなかくのごとく丁寧ならず。

〔大正〕四七、一九、上

と述べている。

一―三に浄土三部經をあげているのは、この三經を一連に捉えようとする意図があつたと見ることができ。龍樹、天親を重視するのは曇鸞に導かれたものと言えるが、道綽も『論註』を通して天親の浄土教の影響を強く受けている。『論註』の引用は実に多い。天親の『浄土論』といって、『論註』を引いて

いることから、特に二者を区別していなかったようである⁽⁴⁾。

師資相承に関しては、『選択集』第一章の末に、『安樂集』の六大徳相承説と唐宋高僧傳の說をあげている。この中、六大徳相承説は『安樂集』第四大門の「中国の三蔵法師並びに此土の徳等、みな共に聖教を祥審し浄土に歎歸するによるに、いまもって勧めてよらしむ」(『大正』四七、一四、中)として菩提流支以下の六大徳をあげている。

以上のことから、『選択集』第一章には法然の浄土一宗の独立という意識があつたと見ることができ。一宗独立といっても、教団を組織するというのではなく、念仏による往生浄土門の自立、独立ということである。従来、天台、三論等それぞれの宗において付屬的に行われていた念仏往生行を一宗として確立することである。そのためには道綽の聖道浄土という二門判別が最も明確で、他宗の理解を得やすかつたのではないか。

六、『選択集』第六章にみられる

「特留念仏」の理由に関して

『選択集』第六に法然は末法万年の後に念仏以外の余行が皆滅しても、念仏の一行のみ残り往生の利益を与えんとする。これは『無量壽經』の下巻に

当来の世に経道滅尽せんに、我、慈悲哀愍をもつて、特
りこの経を留めて止住すること百歳ならん。それ衆生あり
て、この経に値はんものは、意の所願に随てみな得道すべし

〔法然全〕三二五

とあるのに依るものである。法然は「此経」とあるのを「念仏」と読み替えて念仏行の絶対性、普遍性を強調するものである。『無量寿経』の宗旨は念仏にあるとみるところよりこのように主張するのである。ところで、法然は私釈段にその理由を四点で説明している。

- 一、聖道、浄土二経の住滅の前後
- 二、十方、西方二経の住滅の前後
- 三、兜率、西方二経の住滅の前後
- 四、念仏、諸行二行の住滅の前後

というものである。

ところでこの「住滅の前後」という視点は『安樂集』の第六大門の「経の住滅を論ず」とあるのに導かれたものと言える。

経の住滅を弁ぜば、謂く。釈迦牟尼仏一代、正法五百年。像法一千年。末法一万年には衆生滅尽し諸経悉く滅せん。如来痛焼の衆生を悲哀して、特に此の経を留めて止住すること百歳ならんと。

〔大正〕四七、一八、中

とあるのによるものと考えられる。法然はこの道綽の「経の住

滅を論ず」により、第六章を立てたのではないか。ところで道綽はこの第六大門において、十方浄土と西方浄土を対比して

随願往生経に云うがごとし。十方仏国みな悉く嚴浄なり。

願にしたがつて並びに往生を得。しかりと雖も悉く西方の無量寿国にはしらず。何の意か此のごとくなる。ただ阿弥陀仏、観音大勢至と先に発心したまいし時、この界より去りたまい、この衆生において偏にこれ縁あり。このゆえに釈迦処に歎歸したまう。

〔大正〕四七、一八、上

と述べている。つまり、阿弥陀仏が観音、勢至とともに菩提心を発された時、この娑婆世界から行かれたのであるから、この娑婆世界とは特に縁が深いとする。法然が二つ目の理由とするのは、この道綽の十方と西方の二土比較に影響されているといえる。また、法然はこの一、二のいずれの理由にも「聖道は機縁浅薄にして、浄土は機縁深厚なり」といい、また「十方浄土は機縁浅薄にして、西方浄土は機縁深厚なり」と機縁の相違を問題としている。これも道綽の西方極楽は、今日の衆生にとつて有縁の土であるという主張に示唆されたものといえる。

第三の理由は道綽が『安樂集』第二大門の異見邪執を破すところに見られる。しかし、道綽が問題とするのは兜率天と西方極楽との土体の異なりを明かして、兜率、西方往生の会通をはかるものである。法然は「兜率は近しといえども縁浅く、極楽

は遠しといえども縁深し」と、やはり極楽が有縁の土であることを住滅の理由としている。

また、道綽はこの異見邪執においても先の十方と西方往生の比較をして西方往生の勝れていることを明かしている。

第四の理由である念仏諸行の住滅前後に關して法然は

諸行往生の諸教は先に滅す。故に經道滅尽と云う。念仏往生のこの經、特り留まる。故に止住百歳と云うなり。まさに知るべし。諸行往生は機縁最も浅く、念仏往生は機縁甚だ深し。しかのみならず、諸行往生は縁少なく、念仏往生は縁多し。また諸行往生は、近く末法万年に時を局れり。念仏往生は、遠く法滅百歳の代に霑す。

〔法然全』三二六〕

と述べている。

さらに問答を設けて釈尊がこの『無量壽經』のみを末法万年の後も止住したまうのは、阿彌陀仏の念仏往生の本願を説くからであるとする。また『觀經』に定散の行を付属せず、ただ孤り念仏の行を付属するのは仏願に順ずるからであるとする。これらは善導の考えを根拠に述べるものである。

さらにこの念仏の行は、末法万年の衆生に適應するだけでなく、正法、像法、末法の衆生にも適應するものであると述べている。

道綽は『安樂集』第一大門において、現在の衆生は釈尊が入滅してから後の第四の五百年にあたる。まさしく懺悔し功徳を積み、仏の名号を称えるべき時であるという。そしてもし世尊が入滅されて近ければ（正法、像法時）、前の禪定や智慧を實踐することが正學となり、後のもの（稱名）は兼ねて行うことになる。もし世尊が入滅されて遠ければ、後の稱名が正學となり、前の禪定、智慧は兼ねて實踐することになるという。ここでは『大集月藏經』の五五百年説にもとづき、現在末法においては衆生の機根が劣惡になるため稱名念仏を勧めるのである。念仏行を正法、像法の時代にまで広げるといふ主張は見られない。むしろ時代により正、兼と念仏の實踐を規定するものである。

先に引用した『往生大要鈔』には

とをく通ずといは、末法万年ののち法滅百歳まで、この教とまりて、その時にきゝて一念する、みな往生すといへり。いはんや正法像法をやと心えつれば、往生の時もるゝ世なし。かるがゆへにとをく通ずといふなり。

〔法然全』五〇〕

と述べている。

源信の『往生要集』第三、極樂証拠には、天台の『十疑』云うが如しとして

また、無量壽經に云く。末後法滅の時、特りこの經を留

めて百年世にあらしめ、衆生を引接してかの国土に生ぜしめんと。ゆえに知んぬ。阿弥陀仏この世界の極悪の衆生と偏に因縁あり。

〔大正〕八四、四五、下

とある。阿弥陀仏とこの世界の極悪の衆生は因縁が強いという。道綽、源信においては、念仏行を、正法、像法にまで拡大して解釈するといった考えを見ることはできない。

七、念仏の始終の両益

『選択集』第十一章に、念仏の現当の利益を明かし、その後念仏に始終両益のあることを明かしている。

また道綽禪師念仏の一行において始終の両益を立つ。安樂集に云く。念仏の衆生は撰取して捨てたまわず。寿つきて必ず生ず。これを始益と名づく。終益というは、観音授記經によるに、阿弥陀仏の住世長久、兆載永劫にしてまた滅度したまうことあり。般涅槃の時、ただ観音勢至ありて安樂を住持して、十方を接引す。その仏の滅度また住世の時節と等同なり。しかるに彼の国の衆生、一切仏を觀見する者あることなし。ただ一向に専ら阿弥陀仏を念じて往生する者のみありて、常に弥陀現在して滅したまはざるを見たとてまつる。これは即ちこれその終益なり。

と述べている。

〔法然全〕三三八

『選択集』において、直接『安樂集』の文を引用するのは聖道淨土二門とこの箇所だけである。

これは道綽が念仏と諸行を比較して、念仏の価値の勝れていることを明かすものである。現世には撰取不捨の利益（始益）を受け、来世においては常見弥陀の報土に往生するという利益（終益）を受けることを説くものである。道綽の阿弥陀仏報身説とも関連するものである。法然は『選択集』においては念仏に始終両益のあることを明かすだけであるが、『西方指南抄』所収の「法然上人説法」には釈迦の入滅の悲嘆を引き合いにだし、念仏者の終益の功德を明かしている^⑥。

八、偏依善導一師

『選択集』第十六章において法然は「偏依善導一師」の理由を四問答を用いて明かしている。法然と道綽との関連を考える場合どうしてもこの「偏依善導一師」の問題をさけて通ることはできない。

法然は第一に、元曉、智顗、不空、智覺、嘉祥、慈恩といった諸宗の諸師が、それぞれ『遊心安樂道』『觀經疏』『阿弥陀

儀軌』『万善同歸集』『無量寿經疏』『觀經疏』『西方要決』といった浄土教の章疏を著しているのに、なぜ彼等によらずに善導一師によるのかに関して、諸師は確かに浄土の章疏を著しているが、浄土を宗とはしていない。聖道を宗としている。だから諸師にはよらないのであるとする。聖道をもつて宗とするか、浄土をもつて宗とするかということであれば、まさにこれは道綽の二門判を前提にするものである。

第二に、迦才、慈愍三藏などは浄土を宗とするが、三昧を發得していない。それに対して善導は三昧を發得しているので善導に依るのであるとする。

第三に懷感禪師は三昧發得の人であるとされる。しかし善導の弟子である。だから依らないのである。また、この両師には教義上にも相違が見られる。

第四に道綽は善導の師である。それにもかかわらず道綽に依らないのは、道綽は三昧を發得していないからとする。そして『新修往生伝』に記されている道綽の三罪をあげている。しかしこの三罪記述は事実を伝えるものとは考えられない。もともとこの三罪は文諗、少康共著の『往生瑞応刪伝』に初出するもので、王古の『新修往生伝』はこの『瑞応伝』にもとづいている。この『瑞応伝』はもともと往生人の瑞相を伝える目的で編集されたもので必ずしも歴史的事実を伝えるものとはいえない。

い。恐らく善導を敬慕する人々により伝えられていた伝説が記録されたものと言える。

いずれにしてもこの道綽の三罪の記述は道綽の立場を不利にするものであることには違いない。ではなぜ法然はこのような道綽の三罪を記す伝記を採用したのか。理解に苦しみどころである。いままで述べてきたように法然は『選択集』においても、道綽の聖道浄土二門判を初め、浄土を宗とする祖師として道綽、善導を一連に受け取ってきた。『選択集』第八章の私釈段には、

次に深心とは、謂く。深く信ずるの心なり。まさに知るべし。生死の家には疑いをもつて所止とし、涅槃の城には信をもつて能入とす。故に今、二種の信心を建立して九品の往生を決定するものなり。また、この中に、一切の別解、別行、異学、異見等というは、これ聖道門の解行学見を指すなり。その余は即ちこれ浄土門の意なり。文にありて見るべし。明らかに知んぬ。善導の意、またこの二門を出でざるなり。

〔法然全〕(三三四)

と述べている。

この一切の別解、別行、異学、異見等というのは結局、浄土を宗としない人々と言うことができる。聖道門の学問と実践をする人が、聖道門の立場から、浄土の信仰を誹謗するような人というのであろう。浄土の教えが難信な教えであることによ

り、信心を確立することが重要になる。浄土の信心を揺るぎなきものにするとともに、涅槃の都が待っていると考えたのである。法然は善導の安心、起行もこの道綽の聖道浄土の二門におさまるとする。

また、法然は『念仏大意』において

シカルヲ道綽禪師ハ決定往生ノ先達也。智慧フカクシテ講説ヲ修シタマヒキ。曇鸞法師ノ三世已下ノ弟子也。(中略)涅槃ノ講説ラストテ、ヒトヘニ往生ノ業ヲ修シテ、一向ニモハラ弥陀ヲ念シテ、相續無間ニシテ、現ニ往生シタマヘリ。カクノコトキ道綽ハ講説ヲヤメテ念仏ヲ修シ、善導ハ雜修ヲキライテ専修ヲツトメタマヒキ。

〔法然全〕四一〇

と述べている。

このように道綽を「決定往生の先達」と見ている。

また、『往生要集』の末に

私に云く。恵心理をつくすと雖も往生の得否を定めたまうには、道綽善導をもつて指南となすところなり。また処々に多く彼師の釈を引用す。見るべし。しからば則ち恵心を用いるの輩らは、必ず善導道綽に帰すべし。これに依つて先ず綽禪師の安樂集を披いてこれを覽て聖道浄土の二門を分かつて仏教を釈する也。次に善導觀經の疏これを見

るべし。

〔法然全〕二六〇

と述べている。道綽、善導の二師の教義によるべきことを示している。ところが『往生要集略料簡』では

私に云く。恵心理をつくして往生の得否を定めたまうは、導和尚の専修雜行の文をもつて指南とせり。また処々に多く彼の師の釈を用ゆ。見るべし。しかれば則ち恵心を用いるの輩は、必ず善導に帰すべきか。

〔法然全〕一六六

とある。ほぼ同じ内容を説くところであるのに、道綽のことが削除されている。『往生要集略料簡』も同様である。

法然の『往生要集』の釈書においても、道綽善導と一連の二師を立てるものと、後の二釈書のように道綽にふれないものもある。これは一体どういうことなのか。『選択集』の説示構成からすれば、『往生要集』の方が自然である。そう見ると後の二書は何か意図的に道綽を削除したことなのか。

おわりに

以上、法然の『選択集』および法語類において、道綽の浄土教がどのような形で法然によって受容され、法然の浄土教義に展開したかを検討した。法然においては自ら「偏依善導一師」と標するように、善導に対する受け取りかたは、道綽をはじめ

如何なる浄土祖師とも一線を画するものである。法然は善導を弥陀の化身と仰ぎ、その『観経疏』を弥陀の直説と受け取ったのである。これは法然の実践体験、しいて言えば三昧発得という宗教体験を通して感得したものではなからうか。もはや理屈をこえたものといえる。本願の念仏以外、我々に残された道はないとする信順の態度は、法然しか体得できないところであろう。この点が善導と道綽を峻別する一線でなかったかと思う。

法然が「偏依善導一師」の理由として、善導を三昧発得の師とするのも、また、あえて三罪の伝説を示すのも善導と道綽を峻別するためであつたといえる。この点からすれば道綽は何といつても陰が薄い。善導の師とはいつても法然にとつて遠い存在といえる。

しかし、一方、法然は道綽を「決定往生の先達」と認め、浄土を宗とする最初の祖師と見たのではないか。それが道綽、善導を一連に受け取ろうとする態度である。『往生要集釈』に見られたように、道綽は聖道浄土の二門判でもつて仏教を解釈し、善導はその浄土門を受け継いで、浄土の安心、起行を定めたのである。これが、道綽、善導と二師を両輪のように受け取る立場である。

最初に述べたように、道綽と法然は国を異にし、また五百数十年という時代の開きがある。しかし、いずれも時代の変動期

という共通した苛酷な体験をもっている。そこには社会の変革に翻弄され、いたずらに生死に流転してする名もない人々がある。それらの人々に対する切実な思いがこめられている。限らない平等の慈悲に目覚め、浄土往生に唯一の救済をもとめる真実の姿があつたと言える。

以上

〔註〕

(1) 広く『選択集』および法然の遺文に見られる道綽関連の記載を検索し、一部検討を加えたものに、拙稿の「『選択集』における道綽教学の受容と展開」(『佛教大学総合研究所紀要』第六号)と「法然遺文に見られる道綽浄土教」(『佛教大学総合研究所紀要』第七号)がある。

(2) 『安樂集』第三大門には、多くの経論を引いて、無始より今日に至るまで如何に輪廻転生を重ね、受生無数なるかを明かしている。例えば「涅槃經に説くが如し。三千大千世界の草木を取りて、截りて四寸の籌となし、もつて一劫の中に受くるところの身の父母の頭数を数んに、なお自ら斯きず。あるいは云く。一劫の中に飲むところの母の乳は四大海水より多し。あるいは云く。一劫の中に積むところの身骨は毘富羅山の如し。かくのごとく遠劫よりこのかた徒に生死を受け、今日に至るになお凡夫の身となる。なんぞかつて思量し傷歎してやまざらんや。」(『大正』四七、一三、上)とある。

(3) 山本仏骨氏は「凡そ一宗が独立する為には、必ず教判と、宗名と、所依の経論と、師資相承が具備されなければならない。」(『道綽教学の研究』一三二頁)と述べ、その根拠を論じている。一つ一つ指

摘しないが参考にさせていただいた。

- (4) 『安楽集』第二大門の第四問答解釈には、「天親浄土論に依に云く」として、『論註』下巻の障菩提門、順菩提門の趣意を示している。また、第三大門第一の難行道、易行道を明かすところでは、「龍樹菩薩云く」として、『論註』上巻の冒頭の難易二行の文を引いている。

- (5) 天台『浄土十疑論』第四疑（『大正』四七、七八、下）に、ほぼ同様の文がある。

- (6) この念仏の始終両益に関しては、拙稿「念仏の「始終両益」について」（『印仏研』第四六卷一号）と「法然遺文における「念仏の始終両益」について」（『印仏研』第四九卷二号）がある。